

第4章 中学生によるベビーシッター・ボランティア

- 沼津市片浜地区の取り組み -

現在、「子育て支援」というと、子育てを終えた方や子どもの手が少し離れた「子育ての先輩」が、その経験を活かして乳幼児とその親を支援する活動が想起される。おそらく、自らが「子ども」である小学生や中学生・高校生が、より幼い子ども（たとえば乳幼児）の子育てを「支援」するなどとは、通常考えられていないだろう。しかしそのことは、ある一定の年齢や立場の人に「子育て」という行為を限ってしまうことではないのだろうか。今「子ども」という地位にある人も、その多くがいずれは親になり子育てを経験するであろうことを考えると、子育てにかかわる人を限定あるいは固定してしまうことは、不自然であるとさえ思われる。

では、小・中・高校生のような「子ども」は、いったいどのような形で「子育て」にかかわることができ、そこにはどのような効果が見込まれるのであろうか。この疑問にアプローチすべく、筆者は静岡県沼津市の片浜地区でおこなわれている、中学生によるベビーシッター・ボランティアに注目した。そして、このボランティアを発案し、コーディネートしている田村輝美さん（片浜地区社会福祉協議会理事・主任児童委員）にお話をうかがった。

以下では、2007年2月16日に沼津市の大諏訪集会所および沼津市立片浜中学校にて田村さんにうかがったお話をもとに、「子ども」がかかわる「子育て支援」のあり方についてのヒントを探っていくこととする。必要に応じて、インタビューに同席していただいた、同地区主任児童委員の田村玲子さんと沼津市社会福祉協議会地域福祉係の中島さんのお話や、これらのボランティア活動が取り上げられた新聞記事等も参考にした。なお、以下で特に断りがなく「子ども」と記した場合は、乳幼児を指すものとする。

参考までに、本稿で紹介する沼津市片浜地区の地域特性を簡単に示しておこう。片浜地区は人口約1万8,000人、約7,300世帯（2007年2月現在、沼津市調べ）を抱え、三世同居が多く落ち着いた雰囲気のある地域である。地区内にはJR線の駅があるためか、近年はマンションやアパートが建設され、核家族および子どもの数が増加傾向にあるという。地区内には市立の小学校と中学校が1校ずつあり、2校間に地理的距離はあるものの、地区内の児童・生徒のほとんどが同じ小学校・中学校で学ぶことから、小・中学校間の連続性が強い地域であると考えられる。

1. 中学生によるベビーシッター・ボランティアが始まるまで

はじめに、中学生によるベビーシッター・ボランティアが開始されるに至った経緯を記しておこう。このボランティアがおこなわれている片浜地区では、ベビーシッター・ボランティアを始める前に、田村さんが中学生を引き入れておこなってきたボランティア活動がいくつかある¹⁾。田村さんによれば、このようなボランティア活動をしていくなかで、次々にボランティアのアイデアが沸き、その結果としてベビーシッター・ボランティアにたどり着いたという。特に、以下で紹介するような「子育て支援」に関するボランティアに中学生を巻き込むことにより、田村さんはある「期待」や「確信」を感じてきた。その積み重ねが、ベビーシッター・ボランティア活動に結実したといえるのである。

(1)「アタック・ルーム」(小学校における、授業参観時等の託児ボランティア)

片浜地区で中学生がかかわる一連のボランティア活動は、田村さんが1997年から始めた参観日の託児ボランティア「アタック・ルーム」に端を発する。これは、小学校の授業参観の時間に、学校の空き教室で未就学の弟妹を預かる活動である²⁾。小学校の授業参観は、親が子に愛情を傾けるよいチャンスであるのに、親たちは連れてきた未就学児の下の子に気をとられ、授業参観に集中できないことが多いという。このことを聞いた田村さんが、当時、主任児童委員として出入りしていた小学校の校長に相談し、地域の人の手を借りて託児を始めた。

「アタック・ルーム」の託児ボランティアとして中学生がかかわるのは、地域の主婦らによるボランティアが、夕食の準備などで家庭へ戻る16時以降である。預けられる子どもたちは、中学生のお兄ちゃん・お姉ちゃんと遊ぶことが新鮮で楽しく感じるようである。今では、「アタック・ルーム」のある日には、地域の幼稚園が通園バスを1便増やして小学校まで幼児を送り届けてくれるほどに、この制度は浸透し好評を得ているようである。こういった、「アタック・ルーム」に対する子どもや親、学校などの良い反応と、そこでの中学生の活躍ぶりを見て、田村さんはこうしたボランティア活動に中学生の手を借りることの可能性を感じつつあった。

(2) 幼稚園ボランティア

1998年から「心の教室相談員」として片浜中学校に通うようになった田村さんは、中学校の家庭科の授業を手伝っていたとき、「保育」領域の授業の進め方について担当教師から相談を受けた。幼児と触れ合った経験のない中学生があまりに多いことが気にかかっていた田村さんは、近くにある幼稚園に出向いて「育児体験」³⁾をすることを提案した。

実際に幼稚園に中学生を連れて行くと、彼らは当然のことながら、どうやって子どもたちと遊んだらよいのかわからず、戸惑いを見せたようである。しかし、幼稚園児のほうから喜んで手をつないできてくれると、中学生の硬い表情は次第にほぐれていき、触れ合いを心から楽しんだという。事前に作った紙芝居などのおもちゃは、あまりに子どもたちが喜んでくれるので、幼稚園に置いてくることも多いようである。

今の中学生のなかには、肩車を「したこともされたこともない」という生徒が少なくないようである。肩車はほんの一例であるだろうが、遊んだ経験の少なさが、子どもに対する中学生の不安感を余計に増やしている。しかし、幼稚園・保育園で子どもに肩車をせがまれてやってみると、それは難しいことではなく、子どもに喜ばれる遊びであることがわかる。田村さんはそのような中学生と子どもとの様子を見て、「やってみればどうってことないことも、やってみないとわからない」のだと知り、中学生が子どもと触れ合う経験の重要性を実感していた。

このように幼稚園児との楽しい時間を過ごした中学生から、「また行きたい」という声が田村さんのもとに届いた。それを受けて田村さんは、授業時間以外にも幼稚園にボランティアに行けるよう働きかけ、2000年から「幼稚園ボランティア」が実施できるようになった。この「幼稚園ボランティア」は市内の他の中学校にも広まり、市内の幼稚園・保育園の理解を得て、現在では、希望者する生徒はみな、幼稚園・保育園にボランティアに行けるようなしくみが整っているという。

(3) 「エンゼル・サロン」(乳幼児の親子の集いの場)

「子どもと親のケア」という主任児童委員としての役割を満足に果たしていないと感じていた田村さんは、子育て中の母親に対する支援のあり方を考えていた。そこで1999年、子育て中の母親たちの不安を少しでも解消しようと、他の主任児童委員とともに立ち上げたのが、親子が集う居場所「エンゼル・サロン」⁴⁾である。

「エンゼル・サロン」は地域の地区センターや集会所、中学校・高等学校を利用して月に1～2回開かれており、幼稚園入園前の子とその親が集まって交流を深めている。むろん、無料で利用できる。筆者らが調査に訪れた際には、地域の民生委員や地域の男性のボランティア参加もあり、多様な世代の人が和やかに語り合ったり、赤ちゃんに触れ合ったりする姿がみられた（右写真）。



中学生は、夏休み等の長期休暇の際にボランティアに訪れている。あるとき、「エンゼル・サロン」でボランティアをしていた中学生を見て、田村さんは期待を膨らませた。それは、大人が相手だと泣きむずかっていた赤ちゃんが、中学生の膝に乗せられると泣き止んだ、という場面を見たときである。すでに「幼稚園ボランティア」で、幼児と中学生の触れ合いがうまくいっている姿を目の当たりにしていたため、「中学生と乳幼児って、けっこう相性がいいのかも知れない」と感じたという。

2．片浜地区における中学生のベビーシッター・ボランティア

（1）活動の経緯

上記のような「アタック・ルーム」や「幼稚園ボランティア」、「エンゼル・サロン」での中学生と乳幼児との良いかわりを知った田村さんは、「中学生をもっと乳幼児に触れさせたい」と思うようになっていた。しかし、「エンゼル・サロン」のような集いの場は親子の自宅ではないので、子どもが自然な姿を見せているとはいいいない。そこで、中学生を乳幼児のいる家庭にベビーシッターのボランティアとして送り出すことで、子どもの日常生活を中学生に見せることを思いついた。

早速、「エンゼル・サロン」で知り合った、乳幼児を持つ母親たちに頼み込み、夕方、中学生を家庭に訪問させた。当初は8世帯が、田村さんの頼みに応じて中学生を受け入れてくれた。とはいえ、受け入れ側のどの親にとっても、普段接する機会のない中学生に幼い我が子を見てもらうことは不安であり、「1回だけ、2時間だけ我慢して、後は断ろう」と思っていたという。しかし、これまでは自分にまわりついて離れなかった我が子が中学生と楽しく遊んでいる姿を見て、母親らの不安は払拭され、ベビーシッター活動の継続を望んだという。

中学生によるベビーシッター・ボランティアの活動は大変珍しく、メディアに注目され、田村さんのもとには取材が殺到した。そのため、「もう、やめられなくなっちゃったんです」と田村さんは笑って語ってくれたが、この活動を7年も続けているのはそれだけが理由ではないはずである。なぜなら、中学生でも十分に子育て支援に貢献できることがわかったから、そして、中学生と乳幼児との相性の良さに田村さんが抱いていた「期待」は、これまでのボランティア活動の経験を通して、すでに「確信」に変わっていたからである。そして、2001年度から本格的に片浜中学校と片浜地区社会福祉協議会が中心となって、ベビーシッター・ボランティア活動を開始することとなったのである。

ボランティアの受け入れ先は、「エンゼル・サロン」を利用している母親たちに田村さんが声をかけ、ベビーシッターを希望する家庭に依頼している。夕方、忙しい時間帯に手伝いに来られるシッターは大変重宝され、依頼が殺到するため、就学前の子がいる家庭に限っている。

現在は 10 軒ほどの家庭がベビーシッター・ボランティア受け入れの登録をし、中学生の訪問を楽しみに待っているという。

(2) ベビーシッター・ボランティア活動の特徴

片浜中学校におけるベビーシッター・ボランティア活動は、隔週月曜日の 16 時から 18 時までの 2 時間、あらかじめ 2 人 1 組で登録した生徒が、乳幼児がいる家庭を訪問するといふところに特徴がある。なぜ、このような形をとることになったのであろうか。

実施日・時間の設定

田村さんは自身の子育ての経験から、夕方のこの時間帯は親たちが困っている時間帯であることを知っていた。なぜなら、子どもに夕飯を食べさせ風呂に入れなくてはならないのに、当の子どもはぐずりだしたり眠くなったりして、手がかかるからである。その時間帯に、誰かひとりでも家庭に手伝いに行けたら「お母さんたちが少し楽になるかな」と考えていた。

ちょうど、片浜中学校では、月曜日は部活動が休みであり、生徒たちは 15 時に下校できる。この日なら、生徒たちがいったん帰宅してから乳幼児の家庭を訪問するとしても 16 時には訪問先に着くことができる。つまり、「月曜日の 16 時から 18 時」という時間帯は、母親たちのニーズと中学生の時間の都合が合致したところに設定されたのである。

2 人 1 組での訪問

生徒たちが 2 人 1 組で訪問することは、子どもと接した経験の少ない生徒が一人でシッターをするよりも、複数で行ったほうが困惑は少ないだろうという配慮から考えられたものである。また、このボランティア活動には、仲の良い友だちどうしで登録することを勧めている。このことは、生徒にとっては不安を軽減して楽しく活動ができることにもなるし、何より揉めごとが少ないので良いという。ちなみに、生徒たちの希望があり、かつ受け入れ先の家庭の承諾が得られれば、3 人で訪問することも可能である。



ベビーシッター・ボランティアの様子
(田村さん提供)

2006 年度は、男子生徒も含めて 55 名がベビーシッター・ボランティアに登録した。なお、受け入れ先の子ども的人数によって、訪問する生徒の人数を増減させることはないという。

乳幼児のいる家庭への訪問

ところで、乳幼児の母親を支援することや、中学生が乳幼児と触れ合うことを目的とするならば、ほかの場所でおこなう活動でも代替できそうであるのに、なぜ、中学生を乳幼児のいる家庭（自宅）に訪問させるのだろうか。先に触れたように、乳幼児が自然な姿を見せるのは自宅である、との考えが田村さんにあったから、というのがひとつの答えであるだろう。しかし、自宅に見知らぬ他人を入れることに抵抗がある人も多いなか、あえて中学生を家庭に訪問させる理由がほかにもある。それは、親子の自宅で一緒に時間を過ごすからこそ、世話した子どもの名前や性格などを、その家庭の雰囲気も併せて記憶することにもつながるということである。これは、不特定多数の親子が集う場ではなかなか難しいことであると、田村さんは考えている。

また、「子育ては理屈ではなく、自分で実際に子どもに接しながら学んでいくものである」という田村さんの考えにも基づいている。この活動で特に興味深いことは、乳幼児についての学習やシッターの研修などを事前に受けて、中学生がベビーシッターをすることである。一般的に、ボランティアも含め、子どもを預かる仕事に就く場合、保育士や児童福祉士など子ども

に関する資格を所持しているか、事前の研修が義務づけられていることがほとんどである。殊に中学生の多くは乳幼児と触れ合う経験が乏しいことを考え併せると、無謀ともいえる試みであるように感じられる。しかし、田村さんはあえて、中学生たちをいきなり家庭に飛び込ませるのである。もちろん、生徒たちに対して、家庭を訪問したときにしっかり挨拶をすることや脱いだ靴をそろえること、後片づけをきちんとしてくることや親の目の届くところで子どもと遊ぶこと、といった基本的な指導はしている。しかしそれ以上の指導やアドバイスはせず、子どもの母親から直接学ばせたり、子どもと直に接することで感覚をつかませたりしているのである。

加えて田村さんは、ベビーシッター・ボランティアの生徒と受け入れ家庭の組み合わせを、あえて毎回異なるように調整しているという。ファミリー・サポートなどをはじめとするシッター派遣の場合、同じシッターが継続して同じ家庭を訪問することを基本としているようである。しかし田村さんは逆である。それは、「いろいろな家庭を中学生に見てもらいたいから」であるという。いろいろな家庭があり、それぞれに異なった子育ての仕方があることを、家庭の雰囲気なども含めて肌で感じてもらいたい、という意図があるのである。

とはいえ、このようなことが可能なのは、田村さんが「心の教室相談員」(現在はスクールカウンセラー)として中学生と普段から接しているため、彼ら彼女らとコミュニケーションが十分にとれていることが背景にある。また、訪問先の家庭も「エンゼル・サロン」で気心の知れている親子であることに加え、初めて中学生をシッターに遣るときには、必ず田村さんも家庭を訪問して様子を見ていることも、受け入れ先の家庭の安心感を形成するのに役立っている。このようなフォローを含め、中学生と乳幼児の親子をつなぐ役割を田村さんが担っているからこそ、このベビーシッター・ボランティア活動は継続できているのだといえるだろう。裏を返せば、田村さんのような配慮ができる人が間に立たなければこの試みは頓挫しかねず、今後の活動の課題はそこにあるといえる。

(3) 中学校の理解と援助

中学生がベビーシッター・ボランティアをおこなうには、中学校からの協力も不可欠である。片浜中学校では生徒のボランティア活動を積極的に推奨・援助しており、入学前から説明会などでボランティア活動の紹介をし、入学早々にボランティア希望者の名簿を作成するなどの協力をしている。そのおかげで5月の連休明けには活動を始められるので、田村さんは大変感謝している。他にも、ベビーシッターの活動日の昼食時に校内放送をかけ、シッターの担当者に訪問の確認をしてくれることや、シッターの活動日と部活動の練習が重なった場合でさえ、ボランティアを優先するように指導する教員が多いということからも、教職員のボランティアへの理解が深いことがうかがえよう。

また、万が一の事故に備えて、生徒たちは社会福祉協議会のボランティア保険に加入しているが、2005年度からは中学校が全校生徒の分の費用を負担して加入しているという。そのことにより田村さんは、各生徒から個別に保険料を徴収するという煩わしさから解放された。それに加え、2人1組でシッターに行くことになっている生徒の一方が急に行けなくなったとしても、誰もがボランティア保険に入っていることから、他の誰かを誘って一緒に行けることになり、活動に穴を開けなくてすむことにもなっている。

学校が生徒に対し、ボランティア活動を推進するだけなら簡単なことである。しかし、このような一歩踏み込んだ形での中学校の理解と配慮・援助があるからこそ、片浜中学校でのベビ

ーシッター・ボランティアは継続できているのであろう。

3. 中学生によるベビーシッター・ボランティアから学ぶこと ～意義と可能性～

それでは、中学生がベビーシッター・ボランティアをするということには、どのような意義があり、あるいは可能性を秘めているのだろうか。片浜地区でおこなわれているこの活動から検討してみよう。

(1) 乳幼児の親子にとっての意義

物理的・精神的な援助

何よりも、ベビーシッター・ボランティアを受け入れた乳幼児の親にとって、忙しい時間帯にシッターが家庭に来て、子どもの世話をしてくれることは大きな助けになっている。日ごろ、家庭で子育てをしている母親たちは、相当なストレスをためている。特に、乳児を含めた複数の子どもを抱えている場合、乳児に手がかかるため上の子とのかかわりが十分にとれないことに悩んでいることも多い。そのような状態のときに中学生がシッターに来てくれ、普段、十分にかまってやれない上の子と目一杯遊んでくれるのはありがたいという。母親自身にとっても、2週間に1回のわずかな時間ではあるが、子どもが自分から離れてくれて1人になれるこの時間は大変貴重であるといい、ゆったりと過ごしたり、なかなか手をつけられなかった家事や趣味に専念する時間に充てたりしているという。最初は半信半疑ながらも、一度、中学生にベビーシッターを依頼すると「やみつき」になってしまい、継続して依頼してくる母親が多いのもうなずける話である。

子どもの豊かな育ちに対する援助

では、ベビーシッターが「中学生」であることの利点とは何であろうか。言い換えれば、高校生や大学生と異なる点は何なのだろうか。田村さんによると、それは中学生が「大人と子どもとの中間地点にいること」なのだそうだ。すなわち、高校生・大学生は大人の目で子どもの遊びを見て、少しのことでも「危ないよ、やめようね」と制してしまいがちであるが、中学生は子どもと一緒に遊んでしまうのだという。実際、ベビーシッター・ボランティアに訪問した家庭で、中学生が子どもそっちのけで一生懸命に遊んでいることもあったという。一見すると、そうした姿はベビーシッターとしては失格だと思われるだろう。しかし一生懸命に遊ぶ中学生の姿は、乳幼児の目には「大人」ではなく「大きな子ども」として映るため、「遊び相手」になれるのだそうだ。普段、乳幼児にとって中学生のような「大きな子ども」と遊ぶ経験はほとんどないため、こうした接触は乳幼児の育ちを豊かなものにしうるのではないかと考えられる。

中学生に対する認識の変容

さらに乳幼児の親たちが学んだことがある。それは、生の中学生の姿に触れることができたことである。乳幼児が活動する昼間の時間帯には、中学生は学校に行っているため、乳幼児の親子は中学生と顔を合わせることがほとんどない。したがって、乳幼児を持つ親は近所にどのような中学生がいるのか知らないことが少なくない。それに加え、昨今、中学生による凶悪な事件を耳にすることも多いため、乳幼児の親にとって中学生は「怖い存在」「見えない存在」として認識されているようである。このような状況のもとでは、中学生をベビーシッターとして受け入れる際、不安を感じる親が多いのも当然のことといえる。

しかし、中学生が自宅にやって来て、我が子と楽しく遊んでいる姿を見ると、そうした先入観はすっかり消え失せるようである。さらに毎回、異なる中学生がベビーシッターに訪れるこ

とにより、否が応でもいろいろな中学生の姿を目にすることになる。ベビーシッターを受け入れた親からは、「中学生の生の姿を知ることができた」という感想がよく聞かれるという。今は幼い我が子も、いずれは中学生になる。そのときに備え、「今の中学生」を間近で見たり、会話をしたりする機会があるというのは、乳幼児の親にとって大変貴重な機会になっていることは確かなようである。

また、ベビーシッター・ボランティアを経験した中学生らは、自分が世話をした子どもや親に近所で会ったとき、気軽に声をかけ、久しぶりに会った子どもの成長を喜ぶのだという。このように我が子の成長と一緒に喜び、見守ってくれる人が地域にいることは、乳幼児の親にとって嬉しく安心できることであるという。特にそのような「見守り」が中学生であることによって、おそらく「地域の頼れるお兄ちゃん・お姉ちゃん」というように中学生の印象が変容しているのではないだろうか。

(2) 中学生にとっての意義

一方、中学生がベビーシッターをするということは、当の中学生にとってはどのような意義があるのだろうか。田村さんによれば、幼い弟妹がいない限り乳幼児とかかわりを持つ機会のない中学生は、乳幼児に対して恐れに近い感覚を抱いていることが多いという。自らも乳幼児であった時期があるのにもかかわらず、まったく別の存在として見ているようなのである。しかし、「子どもが嫌い」「遊び方がわからない」と怖がっていた生徒も、子どものほうから寄ってきて遊んでくれる姿を見て、「あんなにかわいい子だったら、私、子どもを産んでもいい」「また行きたい」と考えが変わるようである。

昨今、「子どもとのかかわり方がわからない」「子どもが言うことを聞いてくれない」という理由で、親が子どもを虐待する事件を耳にする機会が多い。乳幼児に大人の言葉が通じにくいのは当然のことであるのだが、それさえも理解できないまま親になってしまった場合、虐待につながりかねない。中学生の多くは、いずれ親になるときを迎える。なかには、中学卒業後まもなく出産・育児を経験する生徒もいるだろう。そのため、「親になるための準備」という点でも、中学生という時期に乳幼児とかかわりを持つことは重要であると考えられる。田村さんはまた、同性のきょうだいしかいない中学生を、あえて異性の子どもがいる家庭に派遣するという工夫をしている。異性の子どものおむつを替えさせたり、自分が経験したことのない異性ならではの遊びに触れたりすることによって、自分が親になって異性の子どもを持ったときに困らないように、との配慮からである。

さらに中学生たちは乳幼児と触れ合う体験を経て、子育てが大変であることや、自分にもこのような時期があったこと、今の自分があるのは親のおかげであることなどを実感し、親に感謝の気持ちを抱くようである。中学生は親に反抗することも多く、難しい年頃だと言われるが、中学生に素直な親への感謝の情を抱かせる力を、乳幼児は持っているようである。

こうして中学時代にベビーシッターを経験した生徒からは、卒業後もシッターをやりたいと田村さんのもとにしばしば連絡があるという⁵⁾。さらに、シッターを経験した生徒のなかには保育士になった者もいるという。単なる「中学時代のボランティア」を超えて、生徒たちと乳幼児との関係を育んでいる



ベビーシッター・ボランティアの様子
(田村さん提供)

といえよう。

以上のことを考え併せると、中学生によるベビーシッター・ボランティアは、乳幼児およびその家庭に対する「子育て支援」活動と単純に位置づけることは難しいのではないだろうか。つまり、ベビーシッターをしている中学生は、相手の親子とかかわることによって乳幼児に対する理解が深まったり、出産や育児について考える機会を得たりしている。シッターを依頼した親は、中学生に自身の育児の一部を支えてもらっていると同時に、中学生に育児経験を伝える重要な役割を果たしている。シッターをされている乳幼児でさえも、中学生に貴重な体験をさせているという点で力を貸しているといえよう。したがって、この活動によって「誰が支援し、誰が支援されているのか」ということを明確に区別することが困難であると考えられるのである。

また、現在、中学生に面倒を見てもらっている乳幼児も、いずれ中学生になり、そして親になって自分の子の子育てをしていくことになる。言い換えれば、「子育て」とは、人の生涯のうちその主体と客体とを入れ替えながら展開される営みである。そういった視点でこのベビーシッター・ボランティアを捉えれば、それほど特別ではない活動といえるだろう。「子育て支援」としてではなく、乳幼児の親子と中学生との関係を超えた、空間的にも時間的にも広がる可能性を持つ活動として、このベビーシッター・ボランティアを捉えることを、筆者は提案したい。

おわりに

片浜地区における中学生によるベビーシッター・ボランティアは、活動が開始してから7年が経ち、学校や保護者からも理解と協力を得て安定した活動となってきた。しかしこの取り組みは、全国はおろか市内にさえ広まる兆しはない。市内では取り組み始めた中学校もあったそうであるが、途中で継続できなくなったり、長期休暇の際などにおこなう一時的な取り組みにとどまり、通常の活動へとつながらなかつたりしたという。中学生が乳幼児のいる家庭にあがって子どもの面倒を見るということが、一般的に見るとどれだけ壁の高い行為であるのが推察されよう。

したがって、こうした活動は田村さんがコーディネートを担っているから可能なことであると考えるのは、当然のことかもしれない。田村さん自身がこの地区に住み、社会福祉協議会の理事や主任児童委員を兼任して地域に明るく、さらに地域の中学校のスクールカウンセラーを務め、普段から中学校の教職員や生徒たちと良好な関係が築けているからである。たしかに、先に挙げたような種々のボランティア活動などを通して、田村さんが地道に築き上げてきた、地域のさまざまな人との信頼関係がなければ、発案を実行に移すことさえ難しかったであろう。

では、他の地域や他の人では決してできない活動であるかといえば、おそらくそうではない。田村さんが兼ねているいろいろな立場を複数の人が担っていても、その人どうしが緊密に連携をとっていけば可能であると考えられる。さすがに田村さんも、地域内でのすべての役割をもっているわけではない。たとえば田村さんは中学校のスクールカウンセラーをしていることもあって中学校には頻繁に出入りしているが、離れた場所にある小学校を訪問する機会はそう多くはない。そこで、小学校の事情に詳しい主任児童委員の成田さんと頻繁に連絡をとりあい、情報交換をしている。ほかにも保育園・幼稚園や地域の民生委員や市の社会福祉協議会、老人会などとも連携をとる努力は怠っておらず、地域の人々のニーズを察知し、そのニーズに応えるた

めには誰に何を依頼すればよいのかを的確に把握している。そしてなにより、中学生であろうと、依頼する相手を心から信頼し、任せていくという田村さん自身のスタンスが、こうした綿密な連携を可能にしているといえる。

中学生によるベビーシッター・ボランティアについて、最後にもう一言付け加えたい。中学生という時期は子どもから大人への移行時期であるためか、人とのかかわり方に困難を覚えることも多い。そのような時期にベビーシッターのボランティアに取り組み、大人の言葉が通じにくい乳幼児と接することを通して、中学生はあらためて人間関係構築の基本を学んでいるのではないだろうか。そして、他人の家庭に入れてもらうことで、乳幼児の母親・父親や祖父母など、多様な人々ともかかわりを持つことにもなり、ほぼ強制的に他者との関係を築かなければならない状況に置かれる。しかしその経験を通じて、人間どうしがかわり合うことは、頭で考えているよりも難しくないことを体感することになるのではないだろうか。それを身近な地域でおこなえることは、いまや貴重な経験であるのかもしれない。

総じて現代は、人にかかわる経験、特に乳幼児にかかわる経験が、中学生に限らず一般的に少ない時代であるといえよう。そうしたなかで中学生たちは、学校からの支援を受けたボランティアとしてベビーシッターをおこなっているとはいえ、「ボランティア」や「子育て支援」といった、いわば使命感を帯びた活動であるというよりも、単純に人間とかかわりを持つことの楽しみを感じて活動しているようである。極論を承知で言えば、彼ら/彼女らは「子育て支援」という大義名分を超えた、地域における基本的な人間関係の構築のためのスキルを、ベビーシッター・ボランティアを通じて身につけているといえるかもしれない。「子育て」とは、つまるところ、「人育て」であるのではないだろうか。中学生によるベビーシッター・ボランティアの取り組みは、筆者にそのことを教えてくれたように感じた。

(遠藤 宏美)

<注>

- 1) ほかに、土曜日に小学校の家庭科室で小・中・高校生と地域のボランティアの方とが昼食づくりをする「エプロン・タイム」や、中学生が一人暮らしの高齢者や障害者の家を訪問して交流をおこなう「ふれあい・トーク」も田村さんの発案によっておこなわれている。このような、児童生徒が地域住民とかかわる種々の活動があり、地域や学校の理解を得てきたからこそ、ベビーシッター・ボランティアを始めるにあたっての障壁が低くなったのだと考えることもできよう。
- 2) 授業参観終了後には、保護者懇談会に参加している親と一緒に帰ることを希望する低学年(1・2年生)の児童の預かりも受け入れている。
- 3) 片浜中学校の3年生は、3学期の家庭科の授業で全員が必ず幼稚園で「育児体験」をするという。この授業のおかげで、生徒は中学校時代に何らかの形で子どもにかかわる機会を得ている。
- 4) 「エンゼル・サロン」は片浜地区を含む4地区で開始され、現在は5地区で実施されている。なお、現在、このサロンの一部には、沼津市子育て支援課の事業「子育てサポートキャラバン ぴよぴよ」が賛助している。これは、おもちゃをいっぱい積んだ専用のワゴン車「ぴよぴよ号」で、保育士が市内16カ所でおこなわれているこうしたサロン等を巡回し、遊び場や遊び方を提供したり、育児相談や育児講座を開催したりする支援活動である。田村さん

ら主任児童委員が取り組み始めた「エンゼル・サロン」は、その意義が認められ、市が強力に後押しすることによって同様の支援活動が市内各地に広がっている。

5) なお、このような場合には、中学生のベビーシッター・ボランティア活動とは別の曜日・時間帯で依頼できるため、乳幼児の親子に喜ばれているそうである。

< 参考資料 >

「中高生が『子育て』体験」朝日新聞 2006年7月28日付朝刊記事

「沼津の統計 地区別 世帯・人口 平成19年2月」沼津市企画部情報システム課統計係

<http://www.city.numazu.shizuoka.jp/sisei/h-toukei/toukei/jinkou/chiku/h18/h19.02.htm>

(アクセス日: 2007年3月13日)